

➤ 22日 金曜

へブル



11:8 信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。

11:9 信仰によって、彼は約束された地に他人人のようにして住み、同じ約束をともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。

11:10 堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。

11:11 アブラハムは、すでにその年を過ぎた身であり、サラ自身も不妊の女であったのに、信仰によって、子をもうける力を得ました。彼が、約束してくださった方を真実な方と考えたからです。

11:12 こういうわけで、一人の、しかも死んだも同然の人から、天の星のように、また海辺の数えきれない砂のように数多くの子孫が生まれたのです。

11:13 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。

11:14 そのように言っている人たちは、自分の故郷を求めていることを明らかにしています。

11:15 もし彼らが思っていたのが、出て来た故郷だったなら、帰る機会があったでしょう。

11:16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのため

に都を用意されたのです。

さらに続けてアブラハムたちから学ぶようにと、彼の信仰の生き方が述べられています。彼らは「天の故郷にあこがれていた」からこそ、その信仰がしっかりしていました。もしもこの世の見えるものしか分らなかつたら、状況や見通しに左右されるだけで信仰どころではないでしょう。神のことはも計画もうわのそらとなるでしょう。神様はご自身の備えられた「天の故郷にあこがれる」者に対しては、「彼らの神と呼ばれることを恥」とはならず、「都を用意して」おられるのです。

アブラハムのように素直に神に従い、天の都比べれば地上の生活は「天幕生活」であることを思い、サラのように（一度は不信仰ゆえに笑っても）最後は「約束してくださった方を真実な方」と考え、信仰を全うしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

